View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

〔翻　訳〕

西洋の思想史におけるゲーテの位置づけ(その一)

ルドルフ・シュタイナー
溝　井　高　志　訳

ゲーテとシラー

ゲーテは，かつてゲーテとシラーがイェーナの自然研究会の集まりに同席した後で二人の間で交した会話について語っている[1]。シラーはその会合で話された事柄に不満の色を示していた。というのも自然を観察するにあたってのこまぎれの方法 (eine zerstückelte Art) が彼には納得のいくものではなかった。そして，あのような方法は門外漢にはけっして好感を抱かせるものではないという意見を彼は吐いた。それに対してゲーテは答えて言った。事情に通じている人間にさえあのような方法はおそらく奇異な感じを起こさせるものであり，自然が分解され，バラバラにされた状態において示されるのではなくて，自然が生き生きと活動し，全体から部分へ向かって進んでいく様を示すもっと違った方法があるはずであると。そしてこの当時ゲーテは植物の世界について彼の脳裏に浮び上っていた大きな理念 (die großen Ideen) を発展させつつあった。彼はシラーの目の前で，「多くの特徴のあるペンの線で象徴的な植物を (eine symbolische Pflanze)」描いて見せた。この象徴的な植物によって，あらゆる個々の植物がいかなる特別な形態をとろうとも，それらの中にあって生き続けるその本質となるものを彼は表現しようとしていた。そしてその象徴的な植物はおそらく個々の植物の諸部分が漸次的に生成し，分かれて生じてくる様と，その諸部分の親近性を示そうとするものであったはずである。この象徴的な植物の形態について，ゲーテは1787年4月17日にパレルモ (Palermo) で，次のような言葉を書き記している，「そのようなものはやはり何としても存在しなければならない！もし個々の形成物としての植物がすべて一つの雛形に倣って (nach einem Muster) 造られるということがないとしたら，それらのものが一つの植物であるということは何によって認められるものとなりうるであろうか。」植物形態の多様性を通覧し，その共通となるものに注意を払う時に，精神に啓示される彫塑的・理念的 (plastisch-ideell) な形態についての表象をゲーテはすでに自身のうちに育んでいた。シラーは個々の植物の一つにではなく，あらゆる植物の中に生きているはずのこの形態をじっと眺め，そして首を横に振って言った，「それは経験ではなくて，一つの理念 (eine Idee) です」と。この言葉をゲーテは見知らぬ世界から聞こえてくるもののように聞いた。われわれが目で見，手で触れることができるものの表象に達することができる同じように素朴に (naiv) 知覚する方法で彼はこのような象徴的な形態にたどり着いたと意識していた。個々の植物と同様に，象徴的な植物，原植物 (Urpflanze) もまた彼には客観的な存在であった。それは恣意的な思弁によるものではなくて，とらわれのない観察の結果によるものであると彼は信じてい

無断転載禁止。

た。「私がそれと知ることなしに理念（Ideen）を持ち，しかもそれを目で見ることができるとしたら，それは私にとって極めて有難いことだ」としか彼は答えることができなかった。そしてシラーが「理念に合致するはずの経験といったようなものがいかにしてありえたためしがあるでしょうか。けだし，理念に経験が決して完全に合致しえないところにこそ，理念に特有のものがあるのですから」という言葉を継いだとき，ゲーテは全く不気嫌な気分の中にあった。

相対立する世界観がこの会話の中に見られる。ゲーテは事物の理念（Idee）を事物の中で直接現存しつつ，その中で働き，創造する一つの要素と見ていた。彼の見解によれば，理念というものは一定の条件のもとで，特別な状態においてみずからを具体化しなければならないが故に，個々の事物は特定の形態を取らなければならない。事物が理念に一致しないといったことはゲーテにとってはどうでもいいことであった。けだし，事物は，理念がもくろんで造ったものとは違った形ではありえないからである。シラーは別様に考えていた。彼にとって理念の世界と経験の世界は二つの切り離された世界である。事物と事象の多様性は経験に属するものであり，それは空間と時間を満たすものである。理念の世界は違う種類の現実として経験に対立し，理性がそれをわがものとする。人間の認識は二つの側面から，すなわち，外からは観察をとおして，内からは思惟をとおして成り立つが故に，シラーは認識の二つの源泉を区別する。ゲーテにとっては，経験の世界こそが認識の唯一の源泉であり，理念の世界もそこに含まれている。彼にとっては経験と理念を分けていうことは出来ない。というのも感覚的な世界が物理的な目（ein physisches Auge）の前に存在するように，理念もまた精神的な経験を通して精神的な目（ein geistiges Auge）の前に存在するからである。

シラーの直観はその時代の哲学からきている。このような哲学に決定的な影響を与え，全西洋の精神形成の推進力となった基本的な考え方はギリシャ古代に求められなければならない。ゲーテの世界観の特に本質となるものについてのイメージを得ようとするためには，人はみずからすすんである程度はゲーテの世界観から借りてきた理念によってのみそれを特徴づけることを試みるのでなければならない。それはこの本の後半部分で試みられることになる。他の人が自然の，そして精神の生の領域について考えたことにゲーテが同意したり或いは意見の一致をみなかったがために，彼がある事柄について様々な方法で自分の考えを表明せざるをえなかったという事実を前以て見ておくことが，ゲーテの世界観の特徴を明らかにするうえで役立つことであろう。ゲーテがみずからの視点を獲得するためにみずから相容れないと感じ，対立している表象の仕方を考察するときにのみ，多くのゲーテの要求なるものを人は理解することができる。ゲーテがどのように様々の事象について考え，感じたかを理解することが同時に，ゲーテ自身の世界観の本質なるものについての解明に役立つことになるはずである。もし人がゲーテ的な本質の領域に属することについて何かを語ろうとするならば，ゲーテにおいて無意識に感じられているのに留まっていた多くのことを表現へともたらすのでなければならない。先に挙げたシラーとの会話においてゲーテの精神的な目が見たのは，ゲーテの考え方に相対立する世界観の一つであった。そして，ギリシャ精神の一面から由来し，感覚的な経験と精神的な経験との間の断絶を見るこのような考え方を彼がどのように見ていたか，また，現実のもたらしてくれた世界像において感覚の経験と精神の経験がこの断絶なしに連係しあっているのを彼がどのように見ていたかということを，この対立は明らかに示している。ゲーテが多かれ少なかれ無意識的に直観として西欧の世界観の全体についてみずからの内に抱いていた考えを思想として意識的に人がみずからのうちに体験しようとするならば，その考えとは次のようなものであろう。後に不幸な結果を招く原因と

無断転載禁止。

なったある決定的な瞬間に，人間の感覚器官への不信が一人のギリシャの思想家に巣くうものとなった。彼はこの感覚器官が人間に真理を伝えるものではなくて，人間を欺くものであると信じ始めた。彼は素朴なとらわれのない観察によって得られるものへの信頼の念を失ってしまった。彼は思惟なるもの（das Denken）が物事の真の本質について違ったことを伝えることを発見した。このような感覚器官への不信の念がいかなる脳裏に最初に浮かんだかを定かに言うことは難しい。そのような人物に出会うことができるのはエレアの哲学の学派においてである。その代表者としては紀元前570年にコロフォンで生れたクセノファーネスがあげられる。この学派の最重要人物として現われるのがパルメニデスである。というのも彼こそが誰にもまして鋭く人間の認識には二つの源泉があることを主張したからである。彼は言う，感覚の印象とは欺瞞であり，錯覚であり，真なるものの認識は経験を顧慮することのない純粋な思惟によってのみはじめて達せられうるものであると。パルメニデスにおいて思惟の経験と感覚の経験についてこのような把握がなされたのと同じ方法で，後続する多くの哲学者においても後に発展していく病理が巣くうことになった。そしてこの同じ病理を今日学問的な教養が患っている。このような表象方法が東洋的な直観においていかなる起源をもつかについて論議することは，ゲーテの世界観との関連の内部ではふさわしいことではない。

プラトン的な世界観

プラトンは彼に固有なその驚くべき大胆さによって，経験への不信の念を表明している[2)]。曰く，「われわれの感覚が知覚するこの世界の事物はおよそ真の存在ではない。**それらは常に成るのであって，しかし決してあるのではない**（sie werden immer, sind aber nie.）」と。それらはただ単に相対的な存在であって，全体としてそれらは互いの関係の中で，互いの関係を通してつながりあっているにすぎない。**同様に人はそれらの全存在を非存在**（ein Nichtsein）**と呼ぶこともできる**。かくてそれらはまた本来の認識の客体となるものではない。けだしそれ自身であるところのもの，常に同じ様でありつづけることのできるものについてのみ，本来の認識と呼ばれるべきものがありうるからである。それに対してわれわれの感覚が知覚する事物は，感覚を通して引き起こされる想念の客体（das Objekt eines durch Empfindung veranlaßten Dafürhaltens）でしかない。われわれがそれらの知覚に局限されているかぎり，我々は暗い洞窟の中にしっかりと閉込められているので，振り返って見ることができないために，自らに向かい合っている壁に，自分の背後に燃える炎に照らされて，自分と炎の間を通り過ぎる**諸々の現実の事物の影絵**（die Schattenbilder wirklicher Dinge）以外の何物をも見ることができず，更にまたお互いの，そして無論各人が自らの**その壁にうつる影**しか見ることのできない人間に我々は似ている。**人間の英知とはしかし，経験から学び知ったそれらの影の系列を前以て言うことができるというところにあるであろう。**

プラトン的な直観は世界全体の表象を二つの部分に，すなわち仮象の世界の表象とイデアの世界の表象に引き裂いている。そして後者のみが真実の，永遠の現実に対応するはずのものである。「ただ真実にある（wahrhaft seiend）と呼ばれうるもののみが常にあり，決して成ることがなく，過ぎ行くこともないが故に，それこそがかの影絵の理想的な原像（die idealen Urbilder）であり，それがあらゆる事物の永遠のイデア（die ewigen Ideen），原形（die Urformen）なのである。それらにはいかなる多数性も帰属することがない。けだし，あらゆるものがその本質から見てただ**一なるもの**（eins）でありうるのは，それと同じ名をもつ個々の同じ類の過ぎ去っていくすべての事物がそれの模像，影であるということによってであり，それがそういった類のものの原像そのものたりうる

無断転載禁止。

ことによってなのである。ここには生成も消滅もまた存在しない。けだし，それらは真実に存在する（wahrhaft seiend）ものであり，しかも消え去っていくそれらの模像のように，決して成ることも，消滅するというようなこともないからである。それ故に，このようなものについてのみ本来の認識がある。というのも，そのような認識の客体のみが，常にそしていついかなるときにおいてもあるものであり，たとえありはしてもまた，見る度に再びなくなってしまうようなものではないからである。」

イデアと知覚の区別は，人間の認識がいかにして成立するかということが問題になっているかぎりにおいてのみ正当である。人間は二重のやり方で事物をして己れに語らせるのでなければならない。事物は事物の本質の一部を自発的に人間に語りかける。人間はただ傾聴しさえすれば足りる。これが現実のイデアを欠いた部分である。しかしもう一つの部分については人は事物をして誘い出して語らせるのでなければならない。彼はみずからの思惟を働かせなければならない。それによって彼の内面は事物のイデアによって満たされる。人格の内面にこそまた，事物の理念的な，内的なものが明らかになる舞台がある。そこにおいて外的な直観には永遠に隠されていることが事物によって語りだされる。自然の本質がここで言葉となる。二つの側面の関連を通して事物が認識されなければならないように人間はできている。自然の中には，両方の側面を発現する原因となるものが存在する。とらわれのない人間がこの関連に耳を傾ける。彼はみずからの内面の理念的な言葉によって事物が人間に語る言葉を認識する。とらわれのなさを失った人間のみが事柄を違った風に理解する。彼は彼の内面の言葉が外的な直観の言葉とは違った領域からやって来ると信じる。世界が人間に対し二つの側面から明らかになるという事実が，人間の世界観にとっていかなる重みをもつかということを意識したのはプラトンである。この事実の洞察にとんだ解釈から，感覚の世界がそれだけで考察されるならば，そこには現実が語りだされてくることがないということを彼は認識した。魂の生活からイデアの世界が閃き出し，世界の直観において人間がイデアと感覚による観察を統一的な認識体験としてみずからの精神の前に示すことができるときに初めて，彼は真の現実をみずからの眼前に見ることができる。イデアの光に照らされることがなければ，感覚による観察を通してみずからの前に見ることができるものは仮象の世界である。そう考えるならば，プラトンの見解と同時にまた感覚的な事物を錯覚と見なすパルメニデスの見解にも又，注意が払われねばならない。そしてそのプラトンの哲学こそ，かつて人間の精神から発現してできたもっとも崇高な思想の構築の一つであると我々は言うことができる。そのプラトン主義の確信によれば，あらゆる認識努力の目標は，世界を支え，世界の根底を築く**イデア**を我がものとするところになければならない。この確信をみずからのうちに目覚めさせることができない者は，プラトン的な世界観を理解することが出来ない。しかし，プラトン主義が西洋の思想の発展の中に入り込むかぎり，それはまた違った側面を示す。プラトンは，イデア世界の光が照らさないかぎり，**人間の直観**においては，感覚世界は仮象となるという認識を強調するのにとどまらなかったのみならず，この事実を表明することを通して，彼は感覚世界それ自体は人間が度外視されるならば仮象の世界であって，イデアの中にのみ真の現実が見出されうるという見解を助長することに努めた。この見解から，いかにしてイデアと感覚世界（自然）が人間の外部にあっておたがいに接近しあうのかという問いが生じる。人間の外部にイデアを欠いたような感覚世界を認めることが出来ない者にとっては，イデアと感覚世界がいかに関係するかについての問いは人間の本質の内部で求め，解決されなければならない問いである。そしてゲーテの世界観についてもまた同様のことが言える。ゲーテの世界観にとって，「**人間の外部にあって**イデアと感覚世界はいかなる関係にあるか」というような問いか

無断転載禁止。

けは不健全な問いである。というのもこのような世界観にとって**人間の外部には**イデアのない感覚世界（自然）なるものに存在しないからである。人間だけが自分自身でイデアを感覚世界から切り離し，そしてそのようにイデアを欠いた自然なるものを**思い浮べる**ことができる。それ故に人はこう言うことが出来る，ゲーテの世界観にとっては，何世紀にもわたって西洋の思想の発展において人が関わってきた「イデアと感覚的な事物は如何に互いに関係しあうか」という問いは完全に余計なものであると。そして例えば先に挙げたシラーとの対話で，更にそれ以外にも他の場面でことあるごとにゲーテが異を唱えた西洋の思想の発展を通じて流れるプラトン主義の**この**残滓が，彼のような感覚をもつ者の眼には人間の表象の不健全な要素と映ったのである。彼がはっきり言葉に出し，また彼の内面の中に生き続け，彼に固有の世界観を共にかたちづくる刺激となったのは次のような見解である。即ち，健全な人間の感覚はあらゆる瞬間に何を教えてくれるか，直観の言葉と思惟の言葉は完全な現実を明らかにするために如何に結びつくのかといったことは頭を悩ますことの多い思想家たちによって考察されることはなかったということである。自然が人間に如何に語りかけるかといったことを洞察するかわりに，こういった思想家はイデアの世界と経験の関係について，人為的な概念をかたち作ることに腐心してきたのである。ゲーテによって不健全なものと見なされた世界観のこの思考法に，彼はことあるごとに異を唱えるとともに，またその線にそって彼は自らの方針を定めようともしているが，この思考の方向性がいかに深い意義をもっていたかを完全に理解するためには人は次のことをしかと考えてみなければならない。即ち，感覚世界を仮象へと雲消霧散させ，それによってイデアの世界と感覚世界との関係を歪んだものにしてしまったあのプラトン主義の流れが，キリスト教の真理についての一面的な哲学的理解を通して，西洋の思想の潮流の中でどれほど勢いを増していったかというとである。ゲーテによって不健全なものとみなされたプラトン主義の流れと結びついたキリスト教的なものの見方はゲーテには相容れなかったが故に，彼はキリスト教との関係を築くに際し，極めて困難を覚えざるをえなかった。ゲーテは，彼によって拒否されたキリスト教の発展の中に見られるプラトン主義の継続的な影響を仔細にわたって追跡することはしていないが，彼に対立する思考法の中に，この思想の継続的な影響の残滓を彼は見てとっている。それ故に，ゲーテ以前に何世紀にもわたって形成されてきた思想の方向性の中にこのプラトン主義の残滓が如何にして生じたかについて考察することは，彼がどのようにして**彼のような**考えをもつに至ったかについて考えるに際して光を投げかけてくれる。キリスト教的な思想の発展の経過の中で，幾多の代表的な思想家が彼岸的な世界への信仰と，さらに感覚的な現存在が精神的な世界に対立してもつ価値の問題に対して取り組むべく努力を払ってきた。感覚世界がイデアの世界に対してもつ関係が人間とは切り離された意義をもつというふうに考える時，人はそこから生じる問いかけをたずさえて神的な世界秩序の直観へと参入するに至った。そしてこのような問いに関与する教父たちは，プラトン的なイデアの世界がこの神的な世界秩序の内部でいかなる役割を演じるかということについて考えをめぐらさなければならなかった。それとともに，人間の認識において，人は直接的な直観を通して結びつくイデアと感覚世界を人間の外部にそれ自身で別に存在するものとして考えるのみならず，それらを互いに対立して存在するものとして考え，さらに挙げ句の果てに，イデアを人間に自然なものとして与えられているものの外部に，さらにまた自然から区別された精神性の中に現存するものであると考える危険性を人はもつに至った。イデアの世界と感覚世界についての真実でない直観に基づくこのような考え方が，神的なものは人間の魂の内部ではけっして完全に意識されては存在しえないという正当な考え方と結びつく時，そこからイデア

無断転載禁止。

の世界と自然との完全な対立が生じてくる。そのとき常に人間の精神の中に求められるべきものがその外部の被造物の中に求められる。神的な精神の中にあらゆる事物の原形があると考えられる。世界は神に根拠をおく完全なイデアの世界の不完全な反映となる。そのとき，プラトン主義の一面的な理解の結果として，人間の魂はイデアと「現実」の間の関係から疎外される。人間の魂は，神的な世界秩序との正しく考えられた関係を，**神的な世界秩序の中にあって**イデアの世界と感覚的な仮象の世界のはざまの中で生きる関係へと転じていく。アウグスティヌスはこのような考え方をとおして次のような見解をもつに至った。即ち，「思惟する魂には神とのいかなる共同も認められないが故に，このような魂は神とは何ら本質的に似通うものをもっていない。しかしこのような魂は神の本性へと参画することによって神の光りに照明せられるのであるということを我々はためらうことなく信じたい」[3]と。このようにしてこのような考え方が一面的に強調される結果，自然の観察においてイデアの世界を現実的な存在として共に体験する（miterleben）可能性が人間の魂からしりぞけられる。そしてこのように「共に体験すること(das Miterleben)」が非キリスト教的なこととみなされる。キリスト教そのものを越えてプラトン主義の一面的なものの見方が広まっていく。哲学的な世界観としてのプラトン主義はむしろ思惟の中にその要素となるより多くのものをもち，宗教的な感じ方はその思惟を感情的な生の中に浸し，このようにそれを人間の本性の中に固定する。一面的なプラトン主義の不健全なるものがこのように人間の魂の生の中に根をおろすことによって，それは西洋の思想の発展の中で，それが単に哲学にとどまっていた以上の意義を獲得するに至る。何世紀をも通じて，このような思想の発展において，人間がイデアとして形成してきたものが現実の事物といかなる関係にあるかというような問いに人はたえず直面してきた。人間の魂の中でイデアの世界を通して生きる概念とは，現実といかなる関係ももつことのない単なる表象，名前に過ぎないのか？　それらの概念自身は，人間が知覚し，しかも悟性を通して把握することによって受け取る何らかの現実的なものであるのだろうか？　このような問いかけは，ゲーテ的な世界観にとっては，人間の外部に存在する何ものかについての分別ある問いかけとは言い難い。現実の人間の直観において，このような問いは絶えず生き生きとしたかたちで真の人間の認識をとおして解決されるのである。そしてゲーテ的な世界観はキリスト教的な思想に一面的なプラトン主義の残滓が生きているのを認めるのみならず，純然たるキリスト教もまた，それがプラトン主義の色に染まるならば，ゲーテ的な世界観から程遠いものであること，むしろそれに対立するものであることを知覚する。ゲーテが世界を理解するためにみずからのうちに培ってきた多くの思想の中に生きているのは，彼によって不健全なものとして知覚されたプラトン主義を拒否する姿勢であった。同時に，彼が人間の魂のイデアの世界へのプラトン主義的な上昇に対してとらわれのない感覚をもっていたことは，彼がこの方面でなした多くの発言から察せられる。彼は彼なりのやり方で自然を観察し，探究しつつそれに向き合うことによって，イデアの現実の生き生きと働く様をみずからのうちに実感し，魂がイデアの言葉に心を開くとき，自然自身がイデアの言葉で語りだしてくることを実感した。しかし彼はイデアの世界が切り離されたものとしてみなされることを容認することができなかった。そしてそうすることによってかれは植物の本性のイデアに対して，それは経験ではなくてイデアであるという可能性を自らに許すことができたのである。そのときちょうど感覚的な目が植物の本性の物理的な側面を見るように，彼の精神的な目がイデアを現実としてみるのだということに彼は気付いた。このようにしてゲーテの世界観にはイデアの世界へと向かうプラトン主義的な方向がその純粋な形となってあらわれる。そしてこのような世界観の中で，現実から乖離したプラトン主義的

無断転載禁止。

な流れが克服される。彼の世界観のこのような形成の故に，一面的なプラトン主義としてただ単に形を変えたものとして彼の目に映るキリスト教的な表象をゲーテは拒否せざるをえなかった。そして彼が自らの考えに反するとし，彼が異を唱えようとする多くの世界観をもってしては，西洋の思想形成の内部において，自然とイデアの実態にそぐわない現実についてのキリスト教的——プラトン主義的な見解がうまく克服されていないことを彼は認めざるをえなかった。

プラトン的な世界観の帰結

アリストテレスはプラトン的な世界表象の分裂に抵抗しようとしたが，無駄であった。彼は自然の中に，感覚によって知覚される事物と現象と同様に，イデアを内に含む統一的な本性(ein einheitliches Wesen) を見ていた。人間の精神の中においてのみ，イデアは自立した存存でありうる。しかしこの自立の中にはいかなる現実的なものも付け加わることがない。ひとり魂のみが，イデアとあいまって現実を形成することになる知覚することのできる事物からイデアを引き離すのである。正しく理解されたアリストテレス的な直観と結び付くとき，西洋の哲学はゲーテの世界観から見て誤りと見えたはずの多くのものから，自らを守ることができたであろう。

しかしこの正しく理解されたアリストテレス的な考えは，キリスト教的な考え方のために思想的な基礎づけを得ようとした多くの人達にとって必ずしも具合のいいものとはいえなかった。真に「キリスト教的な」思想家と自称する人達は，最も優れて有効な原理を経験の世界に持ち込むことのできるこの自然についての理解をもってしては，何事も始めることが出来ないことをよく理解していた。それ故に，多くのキリスト教的な哲学者と神学者はアリストテレスを歪曲して理解する。彼等はキリスト教のドグマに論理的な支えを与えるために，彼等の見解に適うような意味をそのアリストテレスの見解にこじつける。精神は，事物の中に創造的なイデアを**探し求める**べきではない。真理というものは神によって啓示という形を通して人間に伝えられる。ただ理性は神が啓示したもの**を裏書き，証明する**（bestätigen）するにとどまる。中世のキリスト教的な思想家によって，アリストテレスの諸命題は，宗教的な救済の真理が哲学的に補強されるように具合よく解釈された。最も重要なキリスト教的な思想家であるトマス・アクイナスの理解を俟ってはじめて，アリストテレスの思想が当時としては可能な限り，キリスト教的な理念の発展の中に深く組み込まれる努力がなされるのである。彼の見解によれば，啓示には最高の真理として聖書の救済の教えが含まれている。しかしアリストテレス的な方法で事物に深く関わり，イデア的な内容をそこから引き出すことは理性を俟ってはじめて可能である。啓示は下され，理性は高まり，その結果として救済の教えと人間の認識はその限界のところで重なり合う。事物に深く沈潜していくアリストテレスの方法は，トマスによれば，人が啓示の領域のそばにまでやって来るのに役立つのである。

*

ヴェルラムのベーコン（F．ベーコン）とデカルトと共に，人間に固有の力を通して真理を求めるという風潮が顕著となる時代が開始される。そしてそれとともに，あらゆる努力が見かけは先の時代の西洋の思考法から独立しているように見えながら，従来の西洋の思想の新しい形式以外の何ものでもないような見解を確立する方向へと思考の習慣が向けられていく。ベーコンもデカルトもともに，経験とイデアがいかなる関係をもつかといったテーマを退化した思考世界の遺物として貶視していた。ベーコンは自然の個別的なものに対するセンスと理解しか持っていなかった。同様のもの，あるいは類似のものとして空間的なそして時間的な多様性の中を貫いて存在しているものを収集することによって，人は自然の生成の普遍的な規

無断転載禁止。

則へと到達しうると彼は考えた。ゲーテは彼について適切にも次のように言っている。「思うに個別のものを選択し，それらに秩序を与え，そしてついに普遍的なものに到達しうるためにのみ，人は個別の事例を収集するべきであると実際彼がたとえ既にくりかえし説いているにしても，**彼にあっては，個別的な事例にあまりにも比重がかかりすぎている。**そして帰納法によって，彼が重視する個々の事例を単純化へ，そして何らかの帰結へともたらしうる以前に，生は遠ざかり，力は尽きる」[4]と。ベーコンにとって，これらの一般的な規則とは，理性をして，個々の事物の領域を都合よく見渡すことを可能ならしめる手段である。しかし彼はこれらの規則が事物のイデア的な内容の基礎となり，自然を実際に生み出していく力であるとは考えない。従って，彼は個別的なものの中に直接イデアを探し求めることをせず，多数の個別のものの中から彼はそれを抽象する。個別的なものの中にイデアが生きていると信じない者は，イデアを個別的な事物の中に探し求めるような傾向をもってはいない。彼は事物を単なる外的な直観に現われるがままに受けとる。ベーコンの意義は，典型的な一面的なプラトン主義によって貶められた外的な直観の意義に人の注意を向けさせたところに，すなわち外的な直観に真理の源泉があることを強調しているところに求められるべきである。しかし彼は直観の世界に対するイデアの世界をして同様に権利を得さしめる立場に立ってはいなかった。彼は理念的なものを人間の精神の中の主観的な要素と見なしていた。彼の思考法は逆転したプラトン主義である。プラトンはイデアの世界にのみ，ベーコンはただイデアを欠いた知覚の世界にのみ現実を見ている。ベーコンの理解の中には，自然の探究者を今日に至るまで支配している思想家の信念の出発点ともいうべきものが見られる。そのような信念は経験の世界の理念的な要素についての間違った見解に冒されている。イデアは単なる名前であり，事物の中にある現実的なものではないという中世の一面的な問題設定から生じた見解と，それは折り合いをつけることはできなかった。

*

他の視点から，しかし少なからず一面的なプラトン的な思考法に影響されて，ベーコンに30年遅れて，デカルトは自らの見解を表明している。彼もまた西洋の思想の中に潜む原罪とも言うべき，自然のとらわれのない見解に対する不信の念に冒されている。事物の実在とその認識可能性への疑いが彼の探究の出発点である。彼は確実性への出発点に到達するために，事物に眼差しを向けることをせず，ひたすら小さな隘路を，言葉の厳密な意味における間道に眼差しを振り向け，思考の最も奥まった領域へと彼は引きこもる。私がこれまで真実と信じていた一切のものが誤りであるということが実際ありうると彼は言う。私が考えていたことが錯覚に基ずいているということはありうることである。しかし私が事物について考えているというその**一つの**事実がそこに残る。たとえ私が嘘偽りを考えるにしても，しかし私は考えているのである。そして私が考えるとき，私はまた存在する。私は考える。故に私は存在する。それによってデカルトはそれ以後彼が思考し続けるための確かな出発点となるものを見出したと信じる。更に彼は問いかける，私の思惟の内容の中には真の存在を指し示すようなものはほかにないのだろうか？　と。そしてその時，彼は一切のうちでもっとも完全な存在としての神の観念を発見する。人間自身は不完全であるのに，いかにして最も完全な存在の観念が人間の思考の世界に入り込んでくるのか？　不完全な存在がそのような観念を自分自身の中から生み出すことは不可能である。けだしその場合，そのような不完全な者が考えることのできる最も完全なものとは不完全なものとなってしまうからである。かくて最も完全な存在そのものについての観念は人間の中に既に置かれているのでなければならない。従って神は存在しなければならない。更にまた，完全な存在がわれわれを欺いてみせるというようなことがありうるであろう

無断転載禁止。

か。我々に現実的なものとして現われる外界はそれゆえにまた現実にあるものでなければならない。さもないと，それは神が我々に欺いて見せる幻像ということになろう。かくしてそれまでに受け継がれてきた考え方の故にはじめは彼に欠けていた現実への信頼の念をいま彼は取り返すことを試みる。極端に作偽的な方法によって彼は真理を求める。一面的に偏った形で，かれは思惟から出発する。思惟にのみ，確信を取り戻す力があると彼は考える。観察されたものについては思惟が介入することによって確信が獲得されうる。このような見解の結果，思惟が自分自身から展開し，証明することのできる真理の全範囲を設定することがデカルトの後継者の課題となる。あらゆる認識の総計を純粋な理性から見つけ出そうと後継者は試みる。最も単純な直接的に明瞭な見解から彼は出発し，更に純粋な思惟の全領域を隈なく渉猟することを彼は試みる。ユークリッドの幾何学を手本として，このような体系が構築されなければならない。というのもこの幾何学もまた，単純な真の命題から出発し，観察をとおしてではなく，単なる推論をとおして，その全内容を展開していくと考えられていたからである。純粋な理性による真理のこのような体系を生み出すことをスピノザは『エティカ』の中で試みた。実体，属性，延長等の若干の表象を，彼は先ず問題として取り上げ，そしてこれらの表象の関係とその内容を純粋に悟性に適う形で探究していく。思惟の体系の中で現実の何たるかが明らかとなる。スピノザはおよそ現実になじまぬこの行為によって獲得される認識をのみ，適当な観念をもたらす世界の真なる存在に対応するものと見なす。感覚的な知覚から生じてくる観念は彼には不適当なものであり，混乱したばらばらのものである。このような表象世界においてまた，知覚と観念の対立についての一面に偏したプラトン的なものの考え方が**後々まで影響を及ぼしている**ことは容易に見て取れることである。知覚に依拠することなく形作られる思想のみが認識にとって価値をもつ。スピノザは更に自らの考えを押し進めて，この対立をまた彼は人間の道徳的なものの感じ方や行為にまで押し広げる。不快な感情は知覚に端を発する観念から生じ，そのような観念が人間の中の欲望，情熱を生み出し，それに身を委ねる時，人はその奴隷となる。理性から生じるもののみが無条件的な快の感情を呼び起こす。人間の最高の幸福とは，理性的な観念の中に生きることであり，純粋な観念の世界の認識に身を委ねることである。知覚の世界から生ずるものを克服し，更に純粋な認識の中で生きる者のみが最高の幸福を感じる。

スピノザに遅れること一世紀を経ずして，ふたたび知覚にのみ認識の源泉をみとめる考え方をひっさげて，スコットランド人，デイヴィッド・ヒュームが現われる。個々の事物のみが空間と時間の中に与えられる。思惟が個々の知覚を結びつけはするが，しかしそれはこれらを結びつけることを可能にするものがこの個々の知覚そのものの中にあるからではなくて，悟性が事物を一つの連関の中に置くことに**慣れている**がためにほかならない。人はある事物が他の事物の後に時間的な継起にともなって現われることを見ることに慣れている。それは継起しなければならないという考えを彼はもっている。彼は第一のものを原因と考え，第二のものを結果と考える。人間は更に彼の精神の考えに継起して彼の体も動いていくと考えることに慣れている。人間は彼の精神が彼の体の運動を引き起こすのだと言うことによって，このことを証明しようとする。人間のもつ観念とは思考の習慣以外の何物でもない。知覚のみが現実を把握する。

*

現存在に達するための幾世紀をも通じて見られた極めて相違した種々の思考方法を一つの方向にまとめてみせたのがカントの世界観である。カントにもまた知覚と観念の関係についての自然な感じ方が欠けている。彼は，彼の先人たちの研究を通して自らの内に受け入れた哲学的な先入観の中に生きている。これらの先入観の一つは，純粋な，とりわけ経験から自由な思

無断転載禁止。

考によってうみ出される必然的な真理というものが存在するという考え方である。そのような真理の証しは，彼の見解によれば，このような真理を内に含む数学とか純粋な物理学に見ることができる。彼の先入観のもう一つは，必然的な真理に直ちに到達するための能力を経験から剝奪してしまったことにある。知覚世界に対する不信がカントにもまた見られる。このような考え方をカントがもつに至ったのは，ヒュームの影響による。思惟が個々の知覚を取纏め，そこからつくりだす諸観念とは，経験に由来するものではなくて，思惟がそれらの観念を勝手に経験に結びつけることによるのであるという主張に関連して，彼はヒュームの言っていることを正しいと認めている。以上の三つの先入観がカントの思想の体系の根底を形作っている。人間は必然的な真理を所有している。それらの真理を経験は人間に示して見せることがないが故に，それらは経験から由来するものではない。にもかかわらず人間はそれらの真理を経験へと適用する。人は個々の知覚をこれらの真理に従って結合する。それらの真理は人間自身から由来する。人間はその本性からして事物を一つの関連の中に置いてとらえるが，そのような関連は純粋な思惟によって獲得される真理に相応している。カントは更に一歩押し進めて，また，人間に外部から与えられるものを一定の秩序の中にもたらす能力が感覚にもあることを認める。これらの秩序もまた事物の印象とともに外部から人間に入り込んでくるわけではない。空間的，時間的な秩序を，印象は感覚的な知覚を通して初めて受け取る。空間と時間は事物に属するわけではない。事物が感覚に印象を生み出す時，これらのものを空間的，時間的な秩序の中にもたらすように人間は生まれついているのである。ただ印象（Eindrücke），感じ（Empfindungen）といったものだけを人間は外部から受け取る。それらのものを空間と時間の中で直観すること，それらを観念へと取纏めること，それが人間に固有の仕事である。しかし感じといったものもまた事物から由来するものではない。人間は事物を知覚するのではなくて，事物が人間に働きかけることによって生ずる印象だけを知覚する。私が知覚する時，私は事物については何も知らない。私は自分自身において知覚が生ずることに気をとめるだけであると言うことができる。私に知覚が呼び覚まされるということはどのような性質が事物に付与されているためなのかということについては，私は何も知るすべがない。カントによれば，人間は事物そのものに関係することはなく，ただ事物が人間に生み出す印象とか，人間自身がこれらの印象をまとまりあるものとするための諸関連にのみ関与するだけである。経験世界とは客観的に外部から受け取られるものではなくて，ただ外的なきっかけを通して，主観的に内側から生み出されてくるものである。経験世界に固有な印象なるものがそこに付与されるのは事物のしからしめるところによるのではなくて，人間の認識器官のしからしむるところによるのである。経験世界はしたがってそのような人間から独立したものとしては全く存在しえない。このような立場から，必然的な，経験から独立した真理を受け取ることが可能となる。けだし，このような真理は，人間が自分自身から自らの経験世界を規定するというやり方にのみ関係するからである。真理は人間の認識器官の法則を内に含んでいる。それは物自体（Ding an sich）とは何ら関係を有しない。このようにして，経験の世界に由来するわけではないが，経験の世界の内容として妥当するような真理があるという彼に固有な先入観に留まることが可能となるような一つの出口をカントは発見する。もちろんこの出口を発見するためには，彼は物自体について何かを知ることができるといったことは人間の精神には不可能であるという見解をもたざるをえなかった。事物によって引き起こされた印象に従って人間の認識器官が自らの中から紡ぎだす経験世界に，彼はあらゆる認識を限定せざるをえなかった。しかし彼が永遠の，必然的な真理を，彼が考えるような意味において救い出すことができさえするならば，物自体の本

無断転載禁止。

性はカントには何の関係があったであろうか。一面的なプラトン主義がカントにおいて認識を歪めるような結果をもたらした。プラトンには，知覚が事物の本質を解き明かすというようなことがないように見えたが故に，彼は知覚から転じて，眼差しを永遠のイデアへと向けた。しかしイデアの性質として，永遠の，そして必然的なものが残るとさえされるなら，イデアが世界の本質への現実的な洞察を開いてみせるということを期待することをカントは断念した。プラトンは世界の真の実質は永遠で，損なわれることなく，変わることがありえないと信じ，これらの性質をイデアにのみ認めることができると信じたが故に，彼はイデアを頼りとする。カントはイデアに関してのみこれらの性質が認められるとするだけで満足する。その時，イデアは世界の本質を解き明かすことをもはやなんら必要とはしていない。

*

カントの哲学的な考え方は更に特別に彼の宗教的な感じ方によって育まれてきた。人間においてイデアの世界と知覚の世界が生き生きと共鳴しあうのを見ることから始めることなく，彼は先ず次のような問いかけを行なう。即ち，イデアの世界の体験を通して，知覚の領域においては決して現われることがないようなものが果たして知られうるのかどうかと。ゲーテ的な世界観をもってものを考える人には，如何にイデアが感覚的な現われの世界において現実性を直観させうるかということが自明なことであるが故に，彼はイデアの本質を把握することによって，イデアの世界の現実的な性格を認識することを求める。その時，彼には次のように問うことが許される。即ち，このように体験されたイデア世界の現実的な性格を通して，自由，不滅性，神的な世界秩序といった超感覚的な真理が人間の認識と関わりを見出す領域へ，どの程度まで深く我々は入り込んでいくことができるのかと。カントはイデア世界の現実性について，イデアの感覚的な知覚との間に有する関係から何かを知ることができるという可能性を否定した。このような前提から，無意識的にではあったが，彼の宗教的な感じ方によって要求されていたこと，即ち，自由，不滅性，神的な世界秩序といったことに関する問いを前にしては，学問的な認識は停止しなければならないということが彼には学問的な成果として明らかとなった。つまり，人間の認識は感覚の領域を取り巻く限界にまでしか歩み寄ることができないということ，それを越えた一切の事柄についてはただ信仰のみが可能であることが彼には明らかとなった。彼は信仰に場所を得させるために，知に制限を加えようとした。ゲーテ的な世界観においては，イデアの世界がその本質的な姿で自然において観照せられ，それによって確固としたイデア世界において，感覚世界を越えた経験の世界へと歩みいることができるという確かな原則をもって知を理解することが肝要である。更にまた，感覚世界にはない領域が認識される時，眼差しはイデアと経験が生き生きと共鳴しあう様へと向けられ，それをとおして認識の確実性が求められる。カントはそのような確実性を見出すことができなかった。それ故に，自由，不滅性，神的秩序といった表象に関しては，認識の外に基礎を見出す方向へと彼は狙いを定める。ゲーテ的な世界観においては，自然において把握されるイデア世界の本質について認識することが我々に許容されているのと同程度に，物自体についてもまた多くのことを認識しようとすることが肝要である。カント的な世界観においては，《物自体》の世界を照明して見せるという権利を認識から剝奪することが重要である。ゲーテは認識において事物の本質を照らし出す明りをともそうと欲する。照明せられた事物の本性がその明りの中にはないこともまた彼には明らかである。しかしそれにもかかわらず，彼はその明りによる照明によって，この事物の本質を明らかにしようとすることを断念しようとはしない。カントは，この明りの中には照明せられた事物の本性がないという考えに，それ故に，明りはこの本性については何事も明らかにすることができないという考え方に

無断転載禁止。

固執する。

ゲーテ的な世界観を前にして，カント的な世界観はただ次のようなものであると言うことができる。即ち，古くからの誤った考え方の除去，現実への自由な本来的な現実性への沈潜を通してではなく，教え込まれ，受け継がれてきた哲学的，宗教的な先入観が論理的にないまぜになったところからこのような世界観が成立したのであると。このような世界観は自然の中の生き生きとした創造に対するセンスが未発達なままであるような精神からのみ生ずる。そしてこのような世界観は，同様の欠陥をもつ精神にのみ影響力をもつことが可能である。カントの考え方が同時代人に及ぼしたその広範な影響から，このような考え方がいかにしっかりと，一面に偏したプラトン主義に呪縛されてあったかが察せられるはずである。

テキストは RUDOLF STEINER, GOETHES WELTANSCHAUUNG (BASEL, 1963) による。

原　　注

1) 論文『幸運な出来事』参照。(キュルシュナー監修『ドイツ国民文学全集』の『ゲーテ自然科学論集』第一巻，108—113頁（以下の引用句もここに記載)。
2) この段落全体と以下の出典の明らかではない引用句においては，プラトンの『国家編』第七章の洞窟の比喩の自由な要約が問題となっている。
3) アウグスティヌスの言葉。オットー・ヴィルマンの『イデアリスムスの歴史』(第二巻，ブラウンシュヴァイク，1896年，266頁)。
4) 『色彩論の歴史，ヴェルラムのベーコン』(キュルシュナー監修『ドイツ国民文学』の『ゲーテ自然科学論集』第四巻，171頁)。

(1989年12月20日受理)

無断転載禁止。